3月11日(日)
2018年（平成30年）
毎月1日、11日、21日発行
昭和54年4月19日
第3種郵便物認可
購読料　年間16,970円
振替00190－4－38126

業界人のための業界専門紙

第1705号

旬刊 旅行新聞
THE RYOKO SHIMBUN

特集 No.486 Special feature article

全国被災地語り部シンポin東北
「KATARIBE」を世界共通語に

東日本大震災からまもなく7年を迎える2月25－26日の2日間、宮城県・南三陸町の南三陸ホテル観洋と、同町内で「第3回全国被災地語り部シンポジウムin東北」が開催された。「「KATARIBE」を世界へ」をテーマに、全国から約400人の「語り部」らが参加。被災地の経験や知恵を日本中、世界に向けて発信し、学び合うことの大切さを確認した。「被災地」と「未災地」を結び、次の世代にも教訓を紡いでいくと宣言し、次回の開催地・熊本につなげていく活動を取材した。【増田　剛】

「被災地」と「未災地」を結び 教訓を次世代へ伝えていく

全国から約400人の語り部らが集まった

阿部隆二郎実行委員長

2年前の第1回全国被災地語り部シンポジウムは、同じ南三陸ホテル観洋で行われ、前回（第2回）は兵庫県・淡路島の淡路夢舞台国際会議場で開かれた。

3回目を迎えた今大会の冒頭、阿部隆二郎実行委員長（南三陸町地域観光復興協議会会長）は、「まもなく東日本大震災から7年を迎える。この集いの大きな目的は震災の風化を防ぎ、震災の教訓を世界に伝えること」とあいさつした。風化を防ぐために、南三陸ホテル観洋が毎日運行している語り部バスが17年度ジャパン・ツーリズム・アワードの大賞を受賞したことを報告。「私たちはSNS（交流サイト）なども含め、さまざまな方法で次世代に、そして未災地に震災の教訓を伝えていかなければならない」と力強く語った。

南三陸ホテル観洋が毎日運行する語り部バス

その後、パネルディスカッション「普遍性・持続性のある震災伝承と震災遺構～『KATARIBE（語り部）』を世界へ・被災地から未災地へ・その先の未来へ～」を開いた。

登壇者は、震災語り部・元気仙沼本吉地方広域消防南三陸消防署副所長の佐藤誠也氏、宮古観光文化交流協会「学ぶ防災ガイド」の元田久美子氏、芸能だいすきプロジェクト・さまざまに代表理事の吉村静代氏、日本外国特派員協会理事のメリー・コーベット氏、上智大学比較文化研究所客員研究員のフラビア・フルコ氏。

基調パネルディスカッションのようす

各地の被災地の姿を伝えるパネル展示

佐藤誠也氏は「語り部にとって一番大事なことは、自分が体験した真実を後世に伝えること。それは広報誌でもSNSでもなんでもいい」と訴えた。

元田氏は伝承と日々の訓練、教育の大切さを語り、「たくさんの人たちの支援に感謝しながら、恩返しとして一人ひとりの命を守るために案内していきたい」と話した。

吉村氏は熊本での震災の教訓として、避難所から仮設、復興住宅に移り住む際に「安心して住めるコミュニティ」の重要性を語り、「ネットワークをつくりながら語り部を育てていくこと」の大切さを強調した。

コーベット氏は、被災地に寄付や支援をするときの日本のシステムやルールの分かりづらさなどを指摘。フルコ氏は外国語の対応ができる語り部を増やすことや、今後、海外の被災地とつながることの意義を説いた。

100分の1を語り切れることなくつなげよう

分科会では①「語り部として私たちが今、伝えたいこと」②「震災遺構と語り部が伝える震災伝承と教訓」③「未来への伝承～10年・100年・1000年先へつなぐために必要なこと～」――の3テーマに分かれて議論。

それぞれの分科会では、ガイドの高齢化や、復興によって案内する場所が減少していくこと、宿泊施設はあるが買い物する店がないため、お金が地元に落ちないなどの課題や問題点も上げられた。また、自然への正しい理解の必要性や、〝ストーリー（物語）の力〟の重要性も確認した。

「明日にでも大災害が起こる可能性がある未災地の人たちに、被災者は何を伝えるべきか」も大きなテーマとなった。「生き残る方法を伝えるべきではないか」という意見も出て、会場を巻き込んだ議論となった。第1分科会のコーディネーターを務めたリアス・アーク美術館学芸係長の山内宏泰氏は「100人すべてに継承されることは難しいが、伝える側（語り部）の目標としては、100分の1を語り切れることなく、永遠につなげていく活動を続けること」と述べた。

阿部憲子女将

第1分科会「語り部として私たちが今、伝えたいこと」

夕刻からは立食形式の交流会、午後8時からはドキュメンタリー上映会&復興トーク「『伝える』～東日本大震災から7年、阪神・淡路大震災から23年」と続いた。

南三陸ホテル観洋の阿部憲子女将は交流会で「全国から被災地を訪れ、縁や絆を深め、地域の交流人口を増加していくことが大事。世界中の皆さんに訪れていただくために、語り部のネットワークを構築していきたい」と呼び掛けた。同ホテルのロビーには、全国のさまざまな被災地の現状を伝える映像や写真パネルも展示。参加者や宿泊客らは足を止め、熱心に見詰めていた。

米山正幸氏が「語り部南三陸宣言」

翌26日の閉会式では、北淡震災記念公園総支配人の米山正幸氏が、「私たちは語り部の英知、人知を共有することで、『誰もが語り部』『もの言わぬ語り部（災害遺構）』がともに重要であると認識した。シンポジウムで得た知見を広く発信し、次世代、未災地へ教訓を伝え、ともに『未来知』をつむぎだす」と、全国被災地語り部「南三陸宣言」を読みあげた。

◇

「1、世界各地で起こる災害から命を守るために、日本の災害の経験、知識を伝え、さらに海外の経験を学び、『KATARIBE（語り部）』を世界共通語にします。

2、私たち語り部の知識を知恵に変え、多様な場を作ります。第2の語り部を育成し、語り部の話を身近な人に伝えてもらいます。

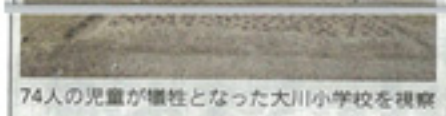
3、語り部は一人ひとりの命を守るために責任と学ぶ姿勢を持ち、自立心を養い続けます」。

次回4回目は熊本県での開催を予定している。

南三陸町、気仙沼市、大川小（石巻市）を視察

震災遺構「高野会館」の内部まで語り部と見学

嵩上げによって南三陸の風景も新一変わる（中央は防災対策庁舎）


74人の児童が犠牲となった大川小学校を視察

大川小の裏山を実際に登った

南三陸ホテル観洋が2012年2月から毎日運行している「語り部バス」は自宅を津波で流されるなど、自らも被災者となったホテル観洋のスタッフが「語り部」となって南三陸のようすを語る取り組み。海外からの視察者も多い。

語り部とともに震災の地を訪れ感じる

全国被災地語り部シンポジウムに先立って25日の午前中にも、「震災を風化させないための語り部バス」を運行。戸倉地区や志津川地区を視察した。志津川地区では民間の震災遺構として保存されている高野会館の内部を「語り部」とともに見学した。

東日本大震災の発生時、高野会館では町の高齢者が集い、芸能発表会を開いていたが、現場での決断と行動によって、327人と2匹の犬の命を救った。同館では、定期的に避難訓練を実施しており、緊急用の備蓄物資も備えていた。震災遺構が消えゆくなか、貴重な場所として、語り部がさまざまな教訓を訪れた人々に伝えている。

翌26日には、語り部バスオプショナルツアーとして「気仙沼コース」、「大川小学校コース（石巻市）」の2コースを実施。

大川小学校は全校児童108人のうち、74人の尊い命が犠牲になった。海から大川小までの距離は3・8㌔。地震発生から8・6㍍の津波が同校を襲うまでに51分の猶予があった。学校のすぐ裏には、毎年3月にシイタケ栽培の体験学習を行っていた山がある。その傾斜はわずか9度。視察者らは実際に裏山に登った。1分もかからずに8・6㍍地点に辿り着いた。教職員が児童をこの裏山に避難させることはなく、校舎に待機させたあと、山ではなく川の方面に避難させたことに、遺族らはやるせない思いを抱いている。

当日、児童の遺族（父親）がガイドを務め、「大川小を学校防災の象徴としたい」と語ったことが、印象に残った。

2018年3月11日(日)【旅行新聞】